

入選 岩手県 久保田 智子 様 (60代 女性)

職をリタイアした私ですが、友人たちとのランチ会での話題は、親や自分の介護をどうするかとか、年金受給についてです。だいたいいくら受給できるのかとは、大きな大きな関心事です。

年金制度発足時は、強制加入ではなかったそうです。一九八五年に強制加入制度が発足。基礎年金制度スタートで社会保障が進められていくことになったと記録がありました。

私は、思い当たることがありました。山奥の小さな小学校に臨時で就職した頃に、手取り給料の計算をしていた教頭先生から、

「貯金とは違うかもしれないが、年老いてから、助かるぞ。だまされたと思うはずないから、手続きしてみたら。」

と、よく分からない説明でしたが、少ない給料から天引きされることになりました。これが私の年金とのきっかけです。当時は、選択でしたから、このお金があったらなあと思ったことも思い出されます。年金制度の歴史と照らし合わせると、数年後に強制加入による基礎年金制度がスタートしたことになります。私は、教頭先生のすすめにより、少し早く年金を掛けていくことになったのです。まだ、基礎年金受給をしていませんが、きっと笑顔で給付の日を待てるかなと思っています。

それにしても、自己反省です。もっと国の政策、年金事情に若い頃から感心をもつべきでした。受給対象になってから情報集めをしたり、先に受給している人から教えてもらったりです。年金関係の書類が送付されて、いざ記入の時も、不明なことばもたくさんあって不安でしたので、街角年金相談に出かけ教えていただきました。一つ一つていねいに説明があり助けられました。

家族でも年金について話題になるようになりました。私の実家は、小さな店を営しておりました。従業員は、二十才代の方を二名雇用していたと記憶があります。そのうちの一人の方が、他界した父のためにお線香をあげに来訪してくれました。お茶を飲みながら思い出を語ってくれたその方は、父には感謝と、しきりに語

りました。若い頃に給料から引き去られた年金が途切れなかったもので、ありがたいとの話でした。小さな店で、安い給料での年金引き去りは、当時は、なんでなんだと思ったこともあったようですが、七十才を過ぎた今、安定した額をいただき満足とのこと。母は、手取り額は増やしたいが、将来を考えてと引き去り決意の思い出を話していました。店の経営もたいへんだった頃なのに年金について従業員の先のことまでをよく勉強していたものだと言った母に拍手を贈りました。

年金の仕組みについて、学生時代に習ったような気もしますが、六十才の自分が先のことすぎて実感も関心もさほどなかったことが本音です。多くの方もそうだと思います。給料から、こんなに引き去らなくてもいいのにと感じたことも事実です。

若者が年金受給について、マイナスの意見を唱えることが多いです。しかし、受給者、受給を控えている者たちが、実際は、このような歴史があるのだとか、苦労もあったとか感謝もたくさんと伝えていく必要があると思いました。六十才は、まだ先のことだと考えるのは、まちがいだと痛感しています。

私と年金のきっかけは、二十代前半の職場上司のアドバイス。そして、親が生き抜くために、苦しい店の経営環境からも従業員の方に感謝されるまで考えぬいた決断。年金と共に歩んだ歴史を大切にしながら、受給していきたいと思いました。

また、我が子にも、まだまだ先と言うことなく考えさせていこうと切実に実感しました。

日本の社会保障が身近にあることを世代を超えて伝えることが大切だと思いました。